

昨年十二月号の本欄では、「実践には想像力が欠かせない」というお話をしました。倫理の実践には大まかな指針はあっても、細かなマニュアルがあるわけではなく、状況に応じて想像力を膨らませ、自分自身で課題を見出していくことが大切だと申し上げました。

パソコンに向かってその原稿を作成する際、「そうぞうりよく」と入力すると、まず画面に現れたのは「想像力」ではなく「創造力」という文字でした。これはよくある同音異義語の類い、気をつけて入力しなければと思ったのですが、原稿を書き進めるうちに、どちらの漢字を使うべきか迷うところがあつたのを覚えていきます。

実践倫理には「想像力」だけではなく「創造力」も必要ではないか、両方を併記すべきではないかと迷いながら、結局は、混乱を避けるために前者だけで通すことにしました。その判断は誤りではなかったものの、喉に刺さった小骨のように、心に引っかかるものがありました。

その小骨がすつと抜けたような気がしたのは、長いあいだ高齢者介護の仕事をされてきた方とお話を

する機会を得たときのことです。その方によれば、介護の仕事、とりわけ認知症のお年寄りの介護には、二つの「そうぞうりよく」、すなわち「想像力」と「創造力」が必要だということです。

認知症の原因といえば、アルツハイマー病などの脳疾患を思い浮かべる人が多いと思います。しかし、介護の立場からすると、お年寄りのさまざまな症状をそれだけで説明するのは不十分で、むしろ原因の多くは普段の生活のなかに見出すことができます。住み慣れた場所からの移動など日常生活における環境の変化、配偶者との死別をはじめとする人間関係の変化、歩行困難や寝たきりといった身体的な変化などがきっかけになることがあり、それまでの生活習慣や価値観、家族との関係なども、症状の表れ方に関わってくるのです。

したがって、徘徊や暴力行為など、認知症のお年寄りがしばしば起こす「問題行動」にも、脳疾患以外の原因があると考えなければなりません。介護する者は、「想像力」を働かせてその原因がどこにあるのかを追究し、さらに「創造力」を発揮して「問題行動」とどのように付き合っていくかを工夫する必要がありますというわけです。

たとえば、「会社へ行ってくる」といつて家や施設を抜け出し、徘徊するお年寄りがいます。定年退職してから何年もたっているのに、なぜそのような行動に出してしまうのかを想像してみましよう。

介護者は、多くの事例から類推して次のように考えられます。そのお年寄りは、今の老いた自分を「本当の自分」であるとは思えず、働き盛りの充実していた時代に回帰することによって、あるべき自分を取り戻そうとしているのではないかと。そうであれば、「何年も前に会社を辞めたでしょ」と注意したり、過去と現在の取り違えを簡単に否定したりすることは、適切な対応とはいえないでしょう。

私たちはさまざまな「問題行動」を、ただ困ったものとして捉えがちですが、そうした行為をお年寄りの無言の「訴えかけ」として理解する姿勢も大切です。その訴えかけに対し、現実離れしているからと突き放すのではなく、しっかり耳を傾けて受容すること、さらに創造力を働かせて、どのように対応するかを工夫することが介護の要となるのです。実際、「仕事が忙しいんだね。気をつけて行ってらっしゃい」と声を掛けるだけで、外出をやめてしまうケースもあるといえます。

実践倫理と同じように、介護も大きな指針のもとに行われます。なかには、実務に関する教科書やマニュアルのようなものもありますが、百人いれば、それぞれ異なる百の生活があるわけですから、どのような状況にも適応できる一つの正解があるわけではありません。とくに、介護者とお年寄りのコミュニケーションは、先例と経験に基づきながら、二つの「そうぞうりよく」を発揮して手探りで築かれていくもので、私たちにとっても、そこから学ぶべきことがたくさんあります。

コミュニケーションの大きな柱でありながら、難題でもあるのが、「利他」のありかたです。介護に携わる人は、なんとかお年寄りのためになるよう努めます。しかし、何をどうすれば相手のためになるかは千差万別で、なかなか予想できないものです。よかれと思つて行ったことが、結果的に善意の押しつけになり、相手に思わぬ精神的苦痛を与えてしまうことさえあります。

以下のような話をよく聞きます。心当たりのある方も多いのではないのでしょうか。

「おばあちゃんの部屋を覗いたら、いろいろなものがあるのが雑然と散らかっていたので、不要と思われるものを片付け、部屋を整頓してあげた。それなのに喜んでもらえず、かえって暴言を吐かれてしまった」

部屋の整頓は善意で行われたのですが、不要と思われた一つ一つのは、お年寄りにとって大切な

思い出の品々であり、はたから見ても乱雑に映る空間こそが、もつとも落ち着ける場になっていたのかも知れません。善意を向ける人と向けられる人との間に、大きなズレが生じてしまったのです。

このようなズレは、介護者とお年寄りの関係に限らず、誰もが日常的に経験していることだと思えます。相手のことを理解しないまま送られる善意は、時として利己的な独走に終わってしまいます。「相手に喜んでほしい」という気持ちか、「相手は喜ぶはずだ」へ、さらに「喜ぶべきだ」へと変わってしまい、自分の善意に依えてくれない相手に、不満や苛立ちを抱く結果になることがあります。

では、こうした善意の独走を可能な限り少なくするための処方箋はあるのでしょうか。
「私たちが持っているのは、「我も人ももの仕合わせ」という強固な思想です。」

ここには、二つの意味が含まれています。一つは、他者が幸福にならなければ自らの本当の幸福もないということ。自分の幸福と人の幸福は共に実現されなければならないということです。

もう一つの意味は、「しあわせ」を「幸せ」ではなく、あえて「仕合わせ」と記したところに示されています。つまり、自分と他者が共に幸福であるためには、それぞれが互いの役割を尊重し、支え合っている、仕え合うことが前提になるということです。

人と人が対等に仕え合うためには、「こうすれば相手のためになるはず」という独りよがりの思い入れや先入観を見直し、相手の立場を理解する努力をしなければなりません。自らの思いを一方的に発信するだけではなく、大きな「想像力」で相手の思いを受けとめること。さらに、そこから導き出せる最善のコミュニケーションを築くため、「創造力」を存分に発揮すること。やはり、実践には二つの「そうぞうりよく」が必要なようです。